

夢野久作『ドグラ・マグラ』出版前後

——神田豊穂・澄二書簡から見た出版経緯

大鷹 涼子

1 『ドグラ・マグラ』起稿から刊行まで

昭和十年一月十五日、松柏館書店より書下ろし単行本として夢野久作『ドグラ・マグラ』が出版された。この作品が何時起稿されたかに関しては久作の日記が参考になる。日記には日々の生活の記録の他に、断片的ではあるが『ドグラ・マグラ』や他の小説に関する創作メモが記されている。現存する日記の中で、最も早く見られる『ドグラ・マグラ』に関する記述は、大正十五年五月十一日「終日、精神生理学の原稿を書く」という一文である。「構想十年、執筆十年」というこの作品は、刊行されるまでに長期間を費やし、膨大な枚数の原稿を幾度かまとめ、その都度、世に出すべく編集者などと折衝を行った。

大正十五年八月二十一日の日記には「狂人の解放治療を書き上げる。千百余枚」とあり、原稿を博文館の森下岩太郎宛に送っている。同年五月、久作は『新青年』の創作探偵小説募集に入選、森下より当選報を得ており、その伝手を頼つてのことと推測される。しかし森下は久作の原稿を見ることなく、当時博文館に出入りしていた川田功が原稿

を受け、昭和二年にかけて久作と書簡を交わし、原稿に対する助言などを与えている。

川田より原稿返却の後も引続き改稿執筆が繰り返され、昭和五年一月十一日「狂人原稿をドグラマグラと改め」、『新青年』の編集者である水谷準に宛てて送り出した。昭和四年十二月三十一日の日記には「水谷氏より手紙。狂人原稿につき」とあり、福岡県立図書館杉山文庫所蔵の当該書簡によると「一千枚」に関して「拝見だけさしていただきたく、『新青年』と相談がつくものであれば、連載の都合も図りたいと思うが、頁数が問題だという返事を得ている。水谷に原稿送付の後、昭和五年の日記には『ドグラ・マグラ』の冒頭に掲げられた巻頭歌が記されている（七月四日）のみで、その他関連した記述はない。

昭和六年から九年にかけての日記は現存していないため、如何なる経緯で水谷のもとから原稿が返却され、また引続き改稿がなされたかどうかは確認できないが、杉山文庫所蔵書簡の調査の結果、昭和六、七年、『文学時代』（新潮社）の編集者であり作家としても活躍した佐

左木俊郎へ出版の打診をしていたことが判明した。佐左木書簡によれば新潮社から『ドグラ・マグラ』を出版する意思があったようだが、昭和八年、佐左木の急死のこともあってか、話は立ち消えになったようである。

その後昭和十年になり松柏館書店から『ドグラ・マグラ』が出版された。奥付では「著作者 杉山萌圃」（久作の法名）、「発行者 大坪徳二」となっている。松柏館書店は春秋社と同ビル内にあり、実質は同じ出版社であった。なお、春秋社は別部門として喜多流謡本刊行会を経営しており、能楽関係の書籍を出版している。久作は喜多流十五世宗家、喜多実と昵懇の仲であり、この縁で紹介を得たようだ。

杉山文庫には春秋社社主、神田豊穂と春秋社の探偵小説出版に腕を揮った神田澄二の書簡が所蔵されている。これらは昭和九年から十年にかけての書簡である。『ドグラ・マグラ』の出版経緯に関しては西原和海の調査により折りにふれ語られてきたが、本稿では神田父子の全書簡を翻刻し、詳述したいと思う。当時の社会状況、世相なども書簡に反映されており、同時に作家や編集者との交流関係も自ずと判明するだろう。

2 神田豊穂・神田澄二書簡翻刻、及び備考

神田豊穂は明治十七年三月四日に生れ、昭和十六年八月六日に歿した（一八八四—一九四二）。謡曲専門出版社であるわんや書店で『謡曲会』の編集長などを務め修行を積んだ後、大正七年、加藤一夫、植

村宋一（のちの直木三十五）らと出版書肆春秋社を興し、日本最初の『トルストイ全集』全十二巻を予約刊行し成功を収める。鷺尾浩（雨工）が参加して兄弟社である冬夏社が社内設立されたが、のちに別れ、春秋社で独立した。『ドストエフスキー全集』、西田天香『懺悔の生活』（大正十年）、中里介山『大菩薩峠』、『世界大思想全集』など、宗教、哲学、思想、文学、音楽を中心として出版した。神田澄二（大正元年三月十一日—昭和二十一年）は神田豊穂の二男であり、春秋社の探偵小説出版に尽力した。『ドグラ・マグラ』の校正など具体的な仕事は彼が担当している。

杉山文庫所蔵神田豊穂書簡は八通^⑩、神田澄二書簡は七通である。同文庫では順不同に所蔵されているが、本稿では時系列順に提示する。書簡の冒頭に通し番号を付け、差出人、使用されている便箋の種類、枚数を記した。判読不可能箇所は□で表した。

①神田豊穂（春秋社便箋）三枚

拝啓

ドグラ・マグラ只今拝見中ですが大体に於て至急出させて頂かうかと云ふ気になつて居ります

たゞ取急いでお願したい事はあの中のア呆陀羅経をもつとずっと短くしてはいたゞけないでせうか 少しくどすぎるやうに思ひますがも一寸 つゞめて頂くわけには行きませんか

こん年末に発売してお正月の売物にしたいと思ひますが校正などは如何しませうか

九州まで送つては少し時間がかゝりすぎると思ひます

お正月早々ドグラ・マガラの会を大下陀児 江戸川乱歩等の人々によつて開き度いと思ひますがこちらで鈴木氏亨君が万事取計つてくれるそうです その時御上京が出来ますか

本はフランス式の仮綴 あつさりした装釘で 一円五十銭から八十銭位のところで出し度と思ひます 部数はともかく危険な時代ですから二千部か乃至二千五百部位を刷かと考へます

印税は一割として一月末二月末三月末の三回に分けてお払ひしたうございます

先は右要用まで

十二月三日

敬具

神田豊穂

杉山萌圓様

二伸

阿呆陀羅經修正の件は原稿をお送りかへしする事は出来ないと思ひますがどこからどこまでとるとか 或はそのまゝにするとか、電報なり飛行便なりで御返事を頂き度いと思ひます

〈備考〉

昭和九年十二月三日の書簡。春秋社の社名が入った便箋が使用されている。この時点では年末の出版予定であったが、実際には年明けに刊行された。

書簡中に名が挙げられている鈴木氏亨（一八八五—一九四八）は小説家で、大正十二年の『文藝春秋』創刊時に編集同人となり、菊池寛の秘書役を務めた。文藝春秋社の経営に携わり、昭和三年には専務取締役に就任している。

後述するが、昭和十年一月二十六日、東京のレインボーグリルで行われた『ドグラ・マガラ』出版記念会に出席し、テンプルスビーチも行った。久作の死後、黒白書房より出版された『夢野久作全集』の発起人にも名を連ねている。

久作は今回の出版に関して、感謝を表した手紙を鈴木に送つたようで、その返信である鈴木氏亨の書簡（昭和九年十二月十六日付。文藝春秋社用箋三枚）が一通現存している。鈴木書簡によれば豊穂が鈴木に『ドグラ・マガラ』出版について相談を持ちかけたが、躊躇逡巡しており、鈴木が「激励して決断をつけ」させたという。「小生としては貴方に対して神田君の態度は見苦しいばかりに要鎮堅固だったので、それを打ちこわしてやりたかつたばかりです。それに貴方の熱と努力と精進とに神田君をして敬意を表させる意味で、思ひ切り出版を薦めたまでのことです」とある。

本書簡においても阿呆陀羅經修正に関して言及されているように、『ドグラ・マガラ』は原稿の分量が膨大なため、雑誌連載に不向きななどという理由で過去にも断られてきた。春秋社にとっては初の探偵小説出版であり、発売日までの期日や内容の面などに関して慎重にならざるを得なかつたのであろう。

ちなみに、既に西原氏前掲「解題」によって明らかにされているが、従来自費出版と言われた『ドグラ・マグラ』には印税が支払われていることが確認された。印税明細に関しては後述する。

② 神田豊穂（春秋社便箋）二枚

早速の御返書ありがたう存じます

祭文を御手許へ御送り返へして居ては間に合はなくなりますから活字を小さくして、も原稿通りに致す事にきめました。装釘は仮綴にするつもりでしたが奮発してやはらかい感のするヌメクロースの本綴としてきれいなカバーをかける事に致しました

これで申分のない本になるつもりです

出版の上は九州方面の宣伝をよろしく御願いたします
校正は社の編輯部の外に柳田泉君が眼を通してくれる事になつておます。自然 忠君愛国とか延喜の御代とか又はエロ・グロすぎるやうな処の文字は多少××が入る事を御覚悟願います

又御打合せする事が出来ましたら次々と申し上げます

御知合の雑誌記者とか又は探偵小説作家とかにこの書が 正月に出版される事を出来るだけ御吹てうなすつておいて下さいませ

発行所名はいろく都合がありまして松柏館書店と云ふ事になります
去る六月以降春秋社発行の本は皆この書店名に変更されておますので御著を少しも傷つける事にはなるまいと存じます

先は右まで

敬具

十二月八日

杉山萌圓様

〈備考〉

昭和九年十二月八日の書簡。

「活字を小さくして、も」と書かれているが、完成した単行本において「祭文」は、冒頭一部活字が小さくされているが、ほぼ全文、他の本文と同じ大きさで印刷されている。

校正を務めた柳田泉（一八九四―一九六九）は明治文学研究者として名高い人物であり、春秋社刊『トルストイ全集』の翻訳も担当している。春秋社からは『カーライル全集』（大正十二―昭和二年）、『随筆明治文学』（昭和十一年）『続随筆明治文学』（昭和十三年）『政治小説研究』（昭和十―十四年）など多数の書籍を刊行した。柳田は『トルストイ全集』の編集のために大正七年十一月、春秋社に入社した木村毅と親しく、大正十一年十二月には、木村に代わり春秋社の編集顧問格になっている。柳田は春秋社が刊行した探偵小説専門雑誌『探偵春秋』にも「随筆探偵小説史稿」を連載（昭和十一年十二月―昭和十二年八月）し、黒岩涙香を中心として、森田思軒、南陽外史など明治期の探偵小説について述べている。

伏字に関してだが「忠君愛国」は『ドグラ・マグラ』の五五二、五八二、五八五、五八八頁に見られる。「延喜の御代」は「祭文」中、以下の部分である。「古い伝へは延喜の昔に。あのや蟬丸、逆髪様が。何の因果か二人も揃ふて。盲人と狂女のあられぬ姿ぢや。父の御門に

棄てられ給ひ。花の都をあととる／＼と。知らぬ憂目に逢坂山の「一

ならなかつた。

六三頁。傍線部伏字)。同様に、死体の解剖の場面——三四三頁から三四七頁に七箇所、五七五頁死体の描写で一箇所伏せられている。また『ドグラ・マグラ』出版後の二月六日、警視庁より呼ばれたとの電話が澄二からあり「聖徳太子」の四字を削れと命令があったという⁽¹⁶⁾。

昭和十年当時、検閲は内務省の内務部局である警保局図書課で行われた。明治八(一八七五)年に、出版許可に関する事務を文部省から内務省へと移管する内容の内務省達乙第九三号が發布されて以来、出版法(明治二十六年制定)が廃止される昭和二十四年(一九四九)までの間、出版された図書は内務省へ納入することとされていた⁽¹⁷⁾。

内務省は明治六(一八七三)年の設置から昭和二十二(一九四七)年十二月三十一日のGHQの解体指令まで存続し、時期により各名称は多少異なる場合もあるが、主要五局は神社局・地方局・警保局・衛生局・土木局であった⁽¹⁸⁾。政治警察である警保局は天皇制を神聖化する神社局と連携しており、『ドグラ・マグラ』においても特に天皇に関する個所を問題とし削除の対象としている。大正十四(一九二四)年の治安維持法(四月二十二日公布、五月十二日施行)制定から更に思想統制が厳しく行われ、主として共産主義左翼勢力の弾圧、反体制反天皇の取締りが強化された。昭和三年七月には図書課を検閲、庶務、調査の三部門に分けて組織的検閲制度が確立されるのだが、同時期警保局内に保安課が新設され、特別高等警察機関が設置されている。政治と言論統制とが結びつきを強める中、出版社としても対策を立てねば

③ 神田澄二(春秋社便箋) 三枚

杉山蒨園様

侍史

春秋社編輯部

神田澄二

拝

冠省

突然私から御手紙差上げる失礼を御赦し下さい。

神田より原稿廻つて来ましたので指示の上印刷所へ廻送致しました。校正は柳田泉氏と私とが責任を以て拝見致します。

扱て画家に依頼しました装幀出来上つて参りました。表紙の裏に「更概」を入れ度いと思ひます。至急四〇〇字詰一枚或は一枚半に御書き願ひ度く存じます。

私の方で書いてもよろしう御座いますが矢張不十分は免れませぬ。貴下に御願ひした方がよいと思ひますので御頼み致します。

活字は適当に^ボと^号とを組み合はせ(勿論本文は^ボルビ付)ました。体裁のよいものを作り度いと思つてゐます。

大体の予定頁数は八〇〇頁の予定に御座います。

取急ぎ右御報告傍々御依頼迄

敬具

〔備考〕

昭和九年十二月の書簡。正確な日時は不明だが、神田豊穂の二通目の書簡（十二月八日）の前後に送られたものかと思われる。

梗概は単行本箱裏に載せられているのだが、前掲「解題」において西原氏は、この梗概を久作が書いたかにはわかに判断しがたいとしている。本文は同「解題」で引用されているため省略する。

なお、予定頁数は八〇〇頁ということだったが、実際は七三九頁であつた。

④ 神田豊穂（春秋社便箋）三枚

前略

ドグラ・マグラ昨日から校正が出はじめました

組上り予定は八百頁の由これでは一円八十銭では一寸むづかしく装釘にも多少の変更を加へ印刷部数を二千五百か三千部とし定価を一円九十銭とする予定です

精神病院へ御寄贈の件まことに結構な事と存じます その数は約四、五十ならむとの事 よく調査した上改めて申上ます

この分は定価の七、七掛けでお買入れを願ひ（勿論印税とお差引き致します）

貴下の御名で発送いたしませう それには

貴下に何らかの御手紙をかいて頂いた方がよいと思ひます こちらで印刷させて本と一緒に発送いたさせますからその原稿を御送り願います 正月十五、六日の頃出版記念会を致さうと思ひます勿論万障おくり合

せ御出京願度うございます 尚会費は参円とし貳円を御馳走と酒とにあて 残の一円で来会者全部に本を配布いたします この分四、五十部と思ひますが 印税の御免除を願います

又記念会の通知は 正月十日頃通知を發しますが発起人に誰と誰とを致すべきや 大体 小生の方で鈴木君と相談取りますが貴兄の方にぜひ共この人をと云ふ方がありますれば 至急御通知おき願います 喜多実君もこの書の出版を非常によろこばれて居りました 右要用まで

十二月十七日

匆々

神田豊穂

杉山萌圓様

〔備考〕

昭和九年十二月十七日の書簡。精神病院へ寄贈の件は一月十五日の日記に、春秋社で「全国精神病院に送る五十六部に署名」をしたことが記してある。同日、柳田泉とも面会している。

⑤ 神田豊穂（春秋社便箋）二枚

前文失礼いたします

記念会に就てでございますが 只今の処発起人は左の顔ぶれでございます

江戸川乱歩 大下宇陀児 甲賀三郎

浜尾四郎 森下雨村 水谷淳^{ツキ} 松野一夫

横溝正史 海野十三 小栗虫太郎

文芸春秋社では菅忠雄 以下二人位

柳田泉 鈴木氏亨、神田豊穂 等

外に貴下様の方で御加へになり度い方がございましたらどうか 御知らせ下さいませ

又 記念会に御招き致します貴下様の御友達の御住所も 前以て御知らせ置き下さりますやう御願申上げます
校正は四百枚ほど進みました
先はとりあへず御通知かた／＼御伺ひ迄

十二月二十八日

神田豊穂

杉山萌園様

〈備考〉

昭和九年十二月二十八日の書簡。本書簡に対する久作の返信の下書きが一通現存している。時期は西原氏により一九三四年十二月と推定されている。便箋複写簿に残されたもので『夢野久作著作集』第六巻（葦書房、二〇〇一年七月）に収録されている。

「小生としてご厚意に甘えさして頂き度い友人は左程沢山には居りませぬ。左の五名だけお差加え出来ますれば結構と存じます」として、水谷準、延原謙、龍造寺光枝、石井俊次、安田勝、高木慎、喜多実の名と住所が記されている。

久作の故郷における記念会に関しては「福岡日日新聞社文芸との間に詰まらぬ蟠まり有之工合悪しく又九州日報社の方は千倉書房主（経

営者）を存せず、何れも能楽以外の事では取りつきにくき状態に有之、効果の如何をも疑惧致し居り」とある。

発起人として当時の主要探偵作家と画家（松野一夫）、出版関係者の名が挙げられており、豊穂への返信に「記念会の御人名拝見致し有体の処身体が縮みました。それ程の御計画とは夢にも思ひませんでした、これには色々御考もお在りになる事と存じますので度胸をきめて上京する事に致します」との決心が記されている。

文芸春秋社の菅忠雄（一八九九—一九四二）は小説家であり『文芸春秋』の編集をしていた人物である。菅は『オール読物』（昭和六年四月号）の編集長でもあり、久作の作品は同誌に昭和七年十二月「老巡查」（編集者、藤澤閑二の原稿依頼書簡一通現存）、昭和八年六月「爆弾太平記」、昭和九年二月—五月「山羊髯編輯長」、四月「乞食の叫び」、十二月「骸骨の黒穂」、昭和十年九月から十一月にかけて「二重心臓」が掲載されている。文芸春秋社の雑誌には『ドグラ・マグラ』出版後も執筆しており、昭和十年八月『文芸春秋』に「S岬西洋夫人絞殺事件」（花房満三郎の原稿依頼書簡（三月二十五日付）一通現存）九月「父杉山茂丸を語る」、十一月「話」に「玄洋社からどんな人物が出たか」を寄稿している。

なお記念会会場であるレインボーグレルは東京内幸町の大阪ビルにあり、四階には文芸春秋社が入っていた。

ここまでの豊穂書簡四通、澄二書簡一通が昭和九年に送られたものである。出版が決定してからかなりの早さで完成に向かっていたこと

が分かる。また昭和九年のうちに出版記念会の計画も大体決定していたようだ。

久作は度々上京していたものの、終生福岡の香椎在住だったのだが、昭和十年一月八日、「午後六時五十一分香椎駅発。下関よりサクラにて上京」している。『ドグラ・マグラ』出版及び記念会、そして『梅津只園翁伝』出版などのために、三月四日まで東京に滞在していた。以下に挙げる書簡は昭和十年に入ってからのものである。

⑥ 神田澄二（春秋社便箋）二枚

杉山萌圓様

春秋社

神田澄二拝

明けまして 御日出度う

御座います。

何卒本年もよろしく御願ひします。

扱ってドグラ・マグラの校正着々進行只今六〇六頁迄校了になりました。

最初の方はどしどし印刷に掛つてみます。

遅ても、十二、三日には本にし度いと馬力を掛けて居ります。

本日別便にて検印並びに出版届御送りします。御捺印の上御返送賜はり度く出版届は二通共御返送願ひします。

尚、飛行便を以て御返送願はれるば結構に存じます。

右御願ひ申上ます。

〈備考〉

昭和十年一月七日の書簡。一月八日に久作は上京しているため、この書簡は入れ違いに九州の自宅に届いたと思われる。

一月十日、久作は早速春秋社へ行き、日記には「鈴木氏^{ツグ}、柳田氏、喜多氏、神田父子に会ひドグラマグラ記念会の相談をする。後大下宇陀児君の処へ行き又相談。水谷君、乾信一郎君と会ひ夕食の御馳走になる」と記されている。検印に関しては翌日の十一日、再び春秋社へ行き、検印紙二千五百枚を捺している。同日には駿河台にある高木病院に行き、高木慎に発起人を依頼、また春秋社に行った後に鈴木氏亨と共に龍造寺光枝に面会している。

⑦ 神田澄二（春秋社便箋）二枚

杉山萌圓様

昨夜は失礼しました。

本日御依頼の原稿（手許にあります分全部）御届けします。

尚案内状はすっかり発送致しました。御申越の方にも夫々発送しました。

念の為、案内状と封筒御覧に入れます。誤植がありますのには恐縮です。

一昨日夜御忘れになりました襟巻一緒に御届けします。

取急ぎ右用々のみ

草々

神田澄二拝

〈備考〉

昭和十年一月十八日の日記に「春秋社よりドグラ・マグラ発刊祝賀会案内状を発送す」とあるので、本書簡は同日もしくは翌日送られたものと推測される。なお同日、妻のクラヤ「ドグラ・マグラ」に助言を与えた王丸勇などに本を送付したことも記されている。

「本日御依頼の原稿」とは時期的に考えて「梅津只圓翁伝」のことであろうか。二十日には同原稿の整理を始めている。

そして昭和十年一月二十六日、「ドグラ・マグラ」の出版記念会が行われた。昭和十年一月二十九日の『読売新聞』文芸欄には「ドグラ・マグラ出版記念会」の様子が写真と共に伝えられている。

書卸し一千二百枚の「ドグラ・マグラ」を松柏館書店から上梓した夢野久作氏を九州の隠棲から迎へ廿六日後六時から探偵小説界のオール・スター・キャストを以つてレインボー・グリルにその出版会が催され、会する者五十八名頗る盛会であつた。

デザート・コースに入り「九州に蟠踞して誰も正体を知らない怪物を御覧に供し乍ら」と云ふ司会者大下宇陀児氏の指名で江戸川乱歩、甲賀三郎、鈴木氏享、森下雨村、浜尾四郎、辰野九紫、高田義一郎、小栗虫太郎、水谷準、松野一夫氏等交々立つて「ドグラ・マグラ(幻魔術)とはどんな意味なのか、彼こそグレート・ドグラ・マグラではないか」、「イヤ夢野久作とは福岡地方で云ふほんやり者のあだ名である」、「長篇書卸しの名人たる彼は夢の旧作に非ずして有名な新作なり」などと乱れ飛ぶ談笑の中に、精神科学者諸岡存氏の本書に対する批判、喜多流謡曲教授杉山萌園

夢野久作「ドグラ・マグラ」出版前後——神田豊穂・澄二書簡から見た出版経緯

氏(夢野氏本名)の咽喉に対する山崎樂堂氏の検討、銭湯に子供を忘れてきた話、「彼には洋傘を借すべし、必ずより良き洋傘と交換して持ち来るべし」と云ふ賢弟石井博士の兄久作を語る言葉なんぞあつて賑やかに十時散会した。

会には五十八名参加したと報じられているが、他にどのような人物の参加があつたか。杉山文庫には記念会時の参会者署名巻軸「夢野久作ドグラ・マグラ出版東京会参会人名録」(巻軸 10.3×254 cm)が所蔵されており、出席者全員の名が書かれているわけではないが、参考までに以下に挙げる。

一刀研二 広川一勝 水谷準 乾信一郎 松野一夫 川端勇男
柳田泉 土岐雄三 山崎樂堂 諸岡存 花岡健二 浜尾四郎 林公平 浅見武蔵 蘭郁二郎 大下宇陀児 江戸川乱歩 堀場慶三郎 杉山一幹 辰野九紫 井村竹市 高田義一郎 龍造寺三枝 戸田順吉 波多野乾一 喜多実 安田紀美子 岡戸武平 高木慎安福真理 安田勝 青柳喜兵衛 堀経道 後藤得三 荒木十三郎 森下岩太郎 小栗虫太郎 大慈宗一郎 □田□一郎 横溝武夫 横山隆一 神田豊穂 野島淳介 内山賢次 神田澄二 鈴木氏享 石井俊次 たみ子 畠郷宗之 (計四十九名)

なお、同会において撮影された集合写真には久作を含め五十一名の顔が見られるのだが、照合した結果、署名をしていないが実際参加した人物として延原謙、平塚白銀、甲賀三郎、井村きよせが挙げられる。竹中芳によれば竹中英太郎も記念会に参加したようだ。これで久作を

大魔 涼子

含め五十五名になるが、残り三名は不明である。

同日の久作の日記には、各スピーチの簡単なメモと、会って嬉しかった人物として「乱歩、井村、土岐、森下、浜尾、延原、青柳」の名を挙げている。

この会の終了後、昭和十年二月四日には「ドグラマグラ会の謝状印刷物届く」と記してある。杉山文庫所蔵「ドグラ・マグラ出版記念会礼状」(14×9cm)の文面は以下の通りである。

拜啓 時下益々御清栄奉慶賀候。陳者去る一月二十六日夜

の拙著発刊記念会に際しては御繁用中の処態々御来会を忝ふし格別の御勢援御指導を賜はり候段御芳情の程不堪感激謹而奉謝候。山間の一野生未だ中央の儀礼に倣はず

種々無調法不行届の段何卒憐恕賜はり今後共不悪御指導御引立の程不堪万折、実は勿々拝趨万々可得御意答の処帰国間際の折柄不任意、誠に乍略儀非礼、不敢取右御礼迄如此御座候

二月 日

敬具

杉山萌圓

様

次に挙げる書簡からは「ドグラ・マグラ」出版後に送られたものである。春秋社との関係は引き続きあり、郷里での出版記念会や、後述するが「梅津只圓翁伝」「氷の涯」などの単行本出版に関して書簡を交わしている。

⑧ 神田澄二(春秋社便箋) 二枚

御手紙拝見しました。

東京の会の模様を品川氏に迄御知らせしました。只、会費の点ですが、貳円にして一円で本を差上げる様にしては如何かと御参考迄に申上げておきました。

貴下より品川氏の御手紙に御希望申上げては如何かと思ひます。そうしますれば品川氏の方でも色々とお都合が良いのではないかと思ひます。

尚、広告は福岡に於ての会を催す直前に致す旨と、御手紙の御申越の案内状及び其の他御送しておきました。

右御返事申上ます。

〈備考〉

日記によれば、昭和十年五月四日「中州中華園でドグラマグラの会」が催されている。「品川氏」とは福岡日日新聞の関係者で、福岡に戻った後四月五日に面会している。同日、九州日報在勤時に世話になった加藤介春とも「夢久会」について話している。また五月一日にも品川と会っている。

杉山文庫には昭和十年一月二十一日付と二月一日付の品川書簡が二通所蔵しており、その中では福岡での記念会―主に会費に関して、久作の交友関係の顔ぶれを見て決めたいという相談がなされている。二通目の書簡に出版社から手紙が来たことが記されており、澄二書簡に「東京の会の模様を品川氏に迄御知らせしました」と書かれているこ

とから、この澄二書簡も二月一日前後のものかと思われる。

⑨ 神田澄二(松柏館書店便箋) 三枚

杉山萌円様

神田澄二拝

昨日は失礼しました。

扱て新聞広告及び雑誌広告の掲載致しました。新聞、雑誌名並びに月日を御報告申上します。

東朝、東日は値段が折合はぬ為、掲載致しませんが、何れ広告せねばならぬと考へてゐます。

壹月廿日 時事新報、宛

壹月廿三日 読売新聞、宛

貳月十三日 大阪朝日新聞^⑩、宛

新青年貳月号、及び参月号

ぶろふいる参月号、

右の通りで御座います。尚本月末再び読売新聞に掲載の予定で居ります。

右取敢へず御報告迄

草々

〈備考〉

昭和十年の書簡。久作在京時の二月に送られたものか。

各媒体の広告文は多少異なるが、『ぶろふいる』に掲載されたものを参考に挙げる。

忽五版!!

日本一幻魔怪奇の本格的探偵小説

日本探偵小説界の最高峯!! 所謂本場の欧米種を凌ぐ幻怪妖麗極りなき雄大な構想!! 探偵小説の通弊たる卑俗趣味を絶した芸術的光彩!!

夢野氏は人も知る、ロマンスと科学の交響によつて、手際鮮かに探偵小説界に新境地を拓いた第一人者だ。その夢野氏の書き下し新稿一千五百枚の長編と云へば、もうそれだけで全日本のファンを魅惑させ飛びつかせるに沢山だらう。加ふるに内容は夢野氏がこの十年間練りに練つた秘材で、氏自ら「之を書く為に生きて来た」と云ふものだ。幻怪、妖麗、グロテスク、エロチシズムの極を近代的感覚に渾然と織り込んだロマンスのモードの中に、白々と冴えかへる冷たい科学のメスが閃る。そこに開れるのは、意外とも、案外とも、全く音語に絶した物凄い人類千古の謎だ……!!

『ぶろふいる』三月号(二月五日印刷納本、三月一日発行)の時点で「忽五版」と謳われているのだが、西原氏によれば同年五月十五日には第六版が出ていることが確認されている。

⑩ 神田澄二(松柏館書店便箋) 一枚

過日は失礼しました。

再版の方(五〇〇)が出来て参りましたので内務省と警視庁の方へ再び届を出さねばなりませんので大変恐縮ですが、今一応出版届頂き度

く存じます。

御捺印の上御返送願ひ度く存じます。

先づは右迄

神田生

〈備考〉

印税明細書（後述）の日付によれば、再版されたのは昭和十年二月十五日である。この書簡はその前後に送られたと推測される。ところで、前書簡〈備考〉で引用した広告に関して疑問が生じる。再版が二月である事から、三月号に「五版」の広告が出るのは無理があり、誤植である可能性もある。

⑪神田澄二（春秋社用1020 原稿用紙）一枚

拝啓

同封にて凸版下刷御送ります。御校正の中、適当な箇所へ御指定の上、谷口印刷所の方へ御返送願上します。

神田生

夢野様

〈備考〉

書簡中の「校正」とは『梅津只圓翁伝』の校正かと思われる。この伝記は「梅津只圓翁」の題で『福岡日日新聞』に昭和九年四月十四日から五月三十一日号まで全三十八回で連載された。単行本は昭和十年三月十日、杉山萌圓名義で非売品として刊行された。

久作は一月二十日、梅津只圓翁の原稿整理を初め、二十三日にも整

理、そして『ドグラ・マグラ』出版後、『新青年』向けの「近世快人伝」の原稿を一段落させた直後、二月七日から梅津只圓翁の伝記編纂を開始、十二日に終了している。二月十三日には春秋社に原稿を渡し、十五日には春秋社で伝記に関する相談をしている。

昭和十年二月二十二日の日記に「春秋社より校正来る」とあり、この書簡はその際付されたものと思われる。その後二月二十五日「終日梅津只圓翁の校正」をし、同日翌日と神田澄二が久作を訪ねている。二月二十七日には再び谷口印刷所から校正が来、二月二十八日に第二回校正を行っている。三月一日にも校正を行ったことが記されている。

⑫神田豊穂（松柏館書店便箋）二枚

拝啓

御在京中は、誠に失礼を致しました。御無事御帰郷の御書面も頂き恐縮に存じて居ります。其後、「ドグラマグラ」は、ポツポツ動いて居りますが返品もありますので寄せては返す波の様に、殆ど同じ部数が残つて居ります。但し、此の書の価値は、識者の間に大いに認められ不朽に残る作品だと云ふ批評をしばしば耳に、しますのは、誠に愉快です。一つ御地でも勢大な会をやつて頂けませんか。広告はその作品の出る度にポツ／＼出して行く心算です。それから少女地獄ですが此の名前は、余りよくないと云ふ皆の意見ですから何とかもう少し考へて頂き度う御座います。多分六月頃出す事にならうかと考へます。

扱同封で梅津只圓翁の製作費明細書を御送り致します

何分三十五六頁の予算超過の上に口絵も多くなり 随分骨を折りましたが、どうか御我慢を願ひ度う御座いますで甚だ恐れ入りますがこちらから差し上げるべき印税の計算書も同封致して置きましたから右を差引いた残額を一先づ御送金お願ひ度う存じます

本は、口絵の刷り方の位置が少し曲つてゐる点が不出来で申訳ないと思つてゐますが表紙と云ひ本文の紙印刷ともに誠によく出来たと考へて居ります。不行届きの段は、幾重にも御許し下さい

来月は、木々高太郎氏の短編集が出る筈です。之は「ドグラマグラ」に次いで、良い本になるだらうと思つて居ります。

先は右要用迄

敬具

神田豊穂

夢野久作様

〈備考〉

昭和十年三月十九日の書簡。

水谷準「探偵小説界昭和十年版」(『ぶろふいる』一九三五年十二月号)では「種んな人たちの感想」の要約として、毀誉褒貶相半ばしたことが語られている。「誉める人は、内容が常人の頭では考へられぬほどにも奇抜で、全篇に不思議な情熱が漲り、それに応じて描写が他人には真似られぬやうな多彩のものであるといふ。感心せぬものは、この作が探偵小説的には縁故が薄く、また単に小説として見ても冗漫な作であるといふ」。両意見とも真実であり、「ドグラ・マグラ」が

探偵小説か否かなどは論外に置いて(中略)若しも、来年あたりから探偵小説界が素晴らしい発展を見せるものとすれば、そこには必ず「ドグラ・マグラ」の巨弾炸裂が原因してゐると見てい、と、ある程度肯定的に捉えている。

『少女地獄』に関しては四月十六日の書簡^⑭〈備考〉に詳述する。なお、木々高太郎の短編集は『睡り人形』(松柏館書店発売、春秋社版。四月刊行)のことである。

⑬ 神田豊穂(松柏館書店便箋)一枚

前略

先程計算書と梅津只円翁の明細書とを同封致しますと申上げましたが不注意の為取忘れました故、此の手紙と共に同封致します。何分共宜しくお願ひ申上げます。

草々

神田豊穂

二伸

内部省の納本は二冊こちらで致しました

夢野久作様

〈備考〉

⑭と同日に送られた書簡。『梅津只円翁伝』請求書及び「ドグラ・マグラ」印税明細書は本稿末に付すので、参照されたい。

一月十六日の明細では数量が二四五〇部になつてゐるが、検印を二五〇〇枚押しており、④豊穂書簡に出版記念会時に配布した「四、五

十部」の「印税の御免除を願います」とあるので、その分の冊数が引かれていられると思われる。再版が二月十五日に出ていることも確認できる。

「本代」は精神病院寄贈分や親類などに送付するため、久作が買い上げた分であろう。一月三十一日、二月二十六日の支払各百円は不明だが、月末の印税分か。二月十五日の「本代（10冊）」は一円九十銭の七・七掛で計算されていることが確認できる。「写真」代とは参会者に送付した出版記念会の集合写真のことかと思われる。三月四日の「印刷代」は三月一日の日記に「謝状註文」とあり、このことであろうか。

請求書の通り「梅津只圓翁伝」は五百部刷られたことが分かる。請求額は三五八円九十銭。「ドグラ・マグラ」の印税と差引されて一九五円九銭、久作が支払うことになっている。

⑭ 神田豊穂（松柏館書店便箋） 三枚

御手紙拝見致しました。

道成寺を見においでにならないとの事誠に残念に存じます。その代り書き切れない程に、原稿が御こみ合ひとの事、之は誠に結構な御話と存じます。どうか濫作のへいに陥られぬ様、十分に御愛護を願ひます。扱、「少女地獄」の事ですが之はどうか、もうしばらく考へさせて頂き度う御座います。その代り前に頂いてをいた「氷の果」の方を先に出させて頂きます。書名は小説氷の果探偵久作 夢野久作 傑作集と云ふ事にさせて頂きます。発行は来月の予定ですから校正等はこちらに御まかせを願ひます。装幀其の他も同様に願ひます。

その他の件に就ては、その時々々に又御相談申し上げます。何時も我儘ばかり申上げて相すまぬ事に思つて居りますが書物の選び方 出す時期等超理論的な、直感に依るものですから幾重にも悪しからず御許しを願ひます。

先は右、取急ぎ御願ひまで

敬 具

四月十六日

神田豊穂

夢野久作様

来月新潮社が探偵小説集を募集すると云ふ事です。之は古い売れ残りの分にくらか刷り増しをして新装して売り出すのださうですが私共のに刺戟された結果である事は云ふ迄ありません。それで私の方では新に確りしたものを並べて行かうと思ふ訳です。然しいづれにもせよドグラマグラの出版が此の機運を作つた動機となつたのは事実で甚だ愉快に思つて居ります。どうかその中、又非常な力作を仕上げて下さる様、切に祈り上げます

《備考》

昭和十年四月十六日の書簡。

「書き切れない程に、原稿が御こみ合ひとの事」とあるが、この時期原稿依頼が数多くあったことが日記にも窺える。昭和十年三月二十一日には「◇名娼満月 富士へ発送済 ◇超人 講談雑誌へ ◇法的

実話 文春へ ◇継続物 日曜日へ ◇快人伝 新青年へ済^②と原稿の予定が記されており、三月二十四日に「超人鬚野博士」を博文館へ送付した後は、二十五日から三十一日まで日記は書かれておらず、多忙であったことが推測される。

四月二日には「新青年」へ「奈良原到伝」を送り出し、「百日紅」の原稿に着手している。「今月は原稿の注文殺到す。先月廿日以後、十日迄に五つの原稿約三四百枚を引受けたり。余としては空前のスビード也。出来るか否かわからず」と記されており、「ドグラ・マグラ」出版後注文が相次いだようである。

新潮社の「探偵小説集」とは、佐左木俊郎が編集し、昭和七年四月から翌年四月にかけて全十巻で出された『新作探偵小説全集』のことである。久作の「暗黒公使」(第九巻)は昭和八年一月十五日に刊行された。本書簡で触れられている「募集」に関しては、昭和十年三月十九日、新潮社から検印の相談が来たことが日記に書かれている。

新潮社出版部に勤務していた時枝茂の書簡(昭和十年三月十七日付)によると、『新作探偵小説全集』は発売後、各篇とも注文があるので、来月あたりに読者を再募集し、宣伝広告をしたいという。ストックも相当あり、それを売り捌くという意味で売り出す計画である。結果売り尽してしまった場合は、改めて検印をお願いすることになるかもしれないが、書面で了解を得たいと記されている。こうした経緯で再び『新作探偵小説全集』は売り出され、『暗黒公使』は昭和十一年二月二十五日に再発売された。

『少女地獄』は結局春秋社から出版されることなく、昭和十一年三月二十日、「かきおろし探偵傑作叢書」の一卷として黒白書房より刊行された。『少女地獄』は「何んでも無い」「火星の女」「殺人リレー」の三篇が収録されている。「殺人リレー」のみ「新青年」昭和九年十月月号に発表されたものであり、他二作は書き下ろしである。

実は「火星の女」はこれ以前、「新青年」に持ち込まれており、当時の水谷準の書簡(昭和九年後半か)に詳しい経緯が書かれている。水谷は「新青年」の新年号連載として原稿依頼をし、久作からは「火星の女」が提出されたのだが、各回のヤマがなく、連載ものとしては扱いにくいと掲載を断っている^②。

『水の涯』は昭和十年五月十五日に発行され、定価一円七十銭であった。奥付には「著作者 杉山泰道」と久作の本名が記されている。発行者は豊穂の長男である神田龍一で、発行所、春秋社、発売所、松柏館書店である。装幀、装画は青柳喜兵衛が担当した。収録作は「水の涯、押絵の奇蹟、あやかしの鼓、死後の恋、一足お先に、爆弾太平記」である。奥付の次頁には水谷準短編集『われは英雄』木々高太郎短編集『睡り人形』大下宇陀児『毒環』夢野久作『ドグラ・マグラ』の広告が掲載されているのだが、これらは後、「傑作探偵小説叢書」という名を冠してシリーズ化されている。

⑬ 神田豊穂 春秋社便箋 三枚

拝啓

過日は失礼いたしました その節は結構な博多人形を頂き有難く朝夕

ながめては 加茂川気分を思ひ出してゐます

扱てゴージアン・ノットの原稿大変面白く拝見いたしました 普通の時ならば勿論何とも云ふべき筋合のものではありませんが このやうな非常時とて検閲のうるさいのは尤な事と思ひます これを単行本にして行なり 発禁をくはされては かないませんから少しく ほとぼりのさめるまで御手許におかれた方がよいやうに存じます 別封書留小包で御送りいたしましたから御入手を願ます

どうか先夜御願申上げたやうに新しい(勿論雑誌に出たので結構です)単行本にならない原稿を一篇 巻頭につけて頂きたいと 存じます 我儘を申してすみませんがよろしく御願申します

又九州帝大の精神病科で序文を下されると云ふ 御稿もお手許でおあきでしたら読せて頂きたいと存じます

先は右要用迄

八月二十八日

敬具

神田豊穂

杉山泰道様

この手紙を書き終へましてからまだ東京においででの由をき、まして御手許へ持参致させる事にいたしました

〔備考〕

「ゴージアン・ノット倶楽部」は杉山文庫に久作の自筆下書き草稿が二篇(二百字詰原稿用紙二十二枚及び二十三枚)が収蔵されており、

西原和海が「暗河」(一九七八年冬、第二十一号)にその一篇(二十

二枚)を翻刻している。西原は書簡文中の「九州帝大の精神病科で序文を下されると云ふ御稿」を「ドグラ・マグラ」のことと推測し、「ゴージアン・ノット倶楽部」の脱稿時期を「ドグラ・マグラ」刊行以前、昭和九年までかとしている。久作は九州帝国大学の高山正雄、諸岡存らと懇意にしていた。しかし実際序文は付されておらず、昭和九年の日記も現存していないため確証は得られない。ただ、八月末の時点で在京中であったことが書簡から分かるが、昭和九年、妻と息子を連れて上京している(時期不明^②)ので、本書簡が昭和九年に送付された可能性も否定できない。結局検閲を理由に原稿を返却されているが、本書簡中に「単行本」という単語が使われているということは、春秋社と久作との間にこのような企画があったことだろうか。

また久作は大日本雄弁会講談社「現代」編集部にも「ゴージアン・ノット倶楽部」を売り込んだようだが、原稿の分量から見ると連載せざるをえない作品だが、各回にヤマがないため雑誌連載には不向きという断りの手紙が来ている(五月二十五日付。年不明)。後、「現代」には昭和十一年一月「人間レコード」が掲載されている。

3 久作の死後——時局と探偵小説

夢野久作は「ドグラ・マグラ」を刊行して一年ほど経た昭和十一年三月十一日、脳溢血で急死した。昨年七月死去した父、杉山茂丸の事後処理のため二月十九日より上京しており、二・二六事件の混乱直後

の東京で死を迎える。

死の直後、喜多実、大下宇陀児などの有志により夢野久作全集が企画され、当初春秋社に出版の快諾を得たが、『少女地獄』『近世快人伝』を出版した新興の書肆、黒白書房が熱望し、全十巻の予定で昭和十一年五月一日に『夢野久作全集』第六巻、六月十五日に第八巻、八月五日に第四巻が刊行された。しかし黒白書房の破綻と共に全集計画も中絶している。

乱歩は昭和十年から十二年にかけてを「日本探偵小説第二の隆盛期」と名付けている。探偵小説専門雑誌が数多く勃興し、昭和十年二月には『探偵文学』（三月号）、昭和十年十一月には黒白書房より『月刊探偵』（十二月号）が刊行され、昭和八年五月号より刊行が開始された『ぶろふいる』も探偵小説界の一大勢力となる。春秋社も『ドグラ・マグラ』刊行後は、探偵小説出版にも力を入れており、江戸川乱歩が『探偵小説四十年』（桃源社、昭和三十六年）で以下の如く回想している。

「ドグラ・マグラ」を皮切りに、創作、翻訳とりまけて五十種に近い出版をなしたばかり、シムソンの翻訳叢書十二冊を刊行し、その余勢は現在（昭和十四年）にも及んで、昨昭和十三年秋からは甲賀、大下、木々三人選集二十四巻の出版を企て、既にその半ばを発売している。一時は春秋社は探偵小説専門書肆の観さえあったほどである。

また春秋社も、雑誌『探偵春秋』を昭和十一年九月（十月号）より創刊した。昭和十年、春秋社は書下ろし長編探偵小説を新聞広告で募

夢野久作『ドグラ・マグラ』出版前後——神田豊穂・澄二書簡から見た出版経緯

集し、蒼井雄の『犯罪魔』が首席を獲得、翌年三月に『船富家の惨劇』と改題、刊行している。その際「選者達の感想文その他の小記事をもせた『探偵春秋』という小冊子を添付し」、「其後単行本を発売する毎に」六号まで続き、それを更に拡大し「出版物の宣伝機関を兼ねた営業雑誌として」別に発売されたものが『探偵春秋』である²¹。

乱歩は澄二について「準繩に捉われざる活気躍動するが如き編集振」と評し、「売価頁数など丁度同じ位の「ぶろふいる」の一大敵国となり、両誌競って内容の整備、頁数の拡張」を計り、「営業雑誌化」していったという。しかし『探偵春秋』も昭和十二年八月号（通巻十一号）で終刊を迎えた。最終号で澄二は探偵書の売行き不振を嘆いている。終刊に関し、六月から連続して、当局から削除処分を受けたことも影響しているのではないかと指摘されている²²。

黒白書房版『夢野久作全集』中絶の後、春秋社は全七巻の計画で昭和十二年四月『山羊鬚編集長』（夢野久作傑作集1）、『氷の涯』（夢野久作傑作集2）、昭和十三年五月『犬神博士』（夢野久作傑作集3）、同月『巡査辞職』（夢野久作傑作集4）と出版したのだが、これまた中絶している。

前述のように、黒白書房破綻のため、昭和十一年七月『月刊探偵』も廃刊され、長期間存続した『ぶろふいる』も、経営上の問題もあつたようだが昭和十二年三月（四月号）で廃刊している。また昭和十年十二月に廃刊された『探偵文学』を引き継ぐ形で、海野十三、小栗虫太郎、木々高太郎が共同編集し、編集実務は蘭郁二郎が行った同人雑

大鷹 涼子

誌『シユビオ』が昭和十二年一月号から刊行されたが、昭和十三年四月号で終刊を迎えている。ここにおいて戦前の探偵小説専門雑誌は終焉を迎え、時局により『新青年』も探偵小説から離れる傾向を強めて行く。

昭和十二年七月からは日中戦争が始まり「内務省の圧迫を蒙ること甚し」として「国内新体制の声轟しく、文芸その他一般娯楽の検閲は急速に嚴重となり、大衆文学のうちでは、先ず股旅物の不健全性が槍玉にあげられ、続いて乱歩などの作品が検閲官の注視の的となった⁽⁵⁾。昭和十四年三月には乱歩の『芋虫』(『新青年』昭和四年)も全編削除を命じられ、隠栖を決意している。他の作家は別ジャンルの執筆へと移るものもあつた。不遇の時代を迎え、探偵小説雑誌の復活や久作の再評価は戦後を待たねばならなかつた。しかしこれら春秋社や他の雑誌の出版活動は、探偵小説界、戦前最後の光芒として記録するに値する。

注

(1) 明治四十三、四十四年、大正元年、大正十三年(三月まで)、大正十五年、昭和二、五年、昭和十年の日記が現存する。これらは全て、杉山龍丸編『夢野久作の日記』(叢書房、一九七六年九月)に翻刻されている。

(2) 石川一郎『わかれ』(『月刊探偵』昭和十一年六月号)。

(3) 夢野久作として「あやかしの鼓」(十月号)でデビューした。この以前も父、杉山茂丸が主宰していた台華社の機関紙『黒白』や勤務先である九

州日報などで文筆活動は行っていたのだが、このペンネームで初めて中央の雑誌に登場した。

(4) 森下雨村「悼惜、辞なし」(『月刊探偵』一九三六年五月)。詳しくは、拙稿「夢野久作宛川田功書簡 翻刻と解題」(『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第二〇号、二〇〇五年一月)。

(5) 大下宇陀児・水谷準・土岐雄三座談会「二人の鬼才を偲ぶ」(『別冊宝石』78号 久生十蘭・夢野久作読本 一九五八年七月)によれば、水谷は原稿を棚の上に放置していたそうである。

(6) 拙稿「夢野久作宛、佐左木俊郎書簡」(『岡大國文論稿』第三三号、二〇〇五年三月)。

(7) 久作は、幼少期は喜多流師範梅津只圓、長じて後は実の父、十四世宗家喜多六平太に入門している。西原和海「解題 夢野久作における神と乞食」

『夢野久作著作集』4梅津只圓翁伝(叢書房、昭和五十四年五月)に詳しい。(8) 西原和海「解題」(ちくま文庫版『夢野久作全集』第九巻)。

(9) 久作の日記中では名前が神田「隆二」「借二」と記されている。日記の翻刻は久作の秘書的役割をしていた紫村一重が担当しており、読みのミスが見られる部分もある。

(10) 別の人物の書簡が一通、豊穂書簡として分類されていたが、それは外した。

(11) 実際は銭に金偏のない別体の漢字が使用されている。以下豊穂書簡の「銭」全て同様の漢字である。

(12) 「キチガイ地獄外道祭文」のこと。

(13) 杉山龍丸「夢野久作の生涯」(『思想の科学』一九六六年十一月十二月号)など。

(14) 活字の大きさの変化により、祭文語りの声の大きさなどの強弱がつき、文章表現上、効果的な結果を生んでいる。松柏館書店版『ドグラ・マグラ』一四五頁。

(15) 『探偵春秋』終刊のため中絶。単行本時に三章分を加筆するも再び中絶。『続隨筆明治文学』所収(『隨筆 明治文学』2 東洋文庫742、二〇〇五年九月)。柳田は特に黒岩涙香に心酔しており、「黒岩涙香著訳詳説目録」(『未定稿』(『書物展望』五ノ七号、昭和十年七月)など)も物している。

(16) 『ドグラ・マグラ』本文での「聖徳太子」該当箇所は五〇九頁。

(17) 内務省へ製本二部を発行三日前までに納本(出版法(明治二六年法律第一一五号)による)し、検閲後一部は帝国図書館(明治三十年)昭和二十二年)に交付される(内務省交付本)。太田真舟「戦前の納本・検閲・内務省の発禁本について」(『日本古書通信』40(10)一九七五年十月)に詳しくい。

(18) 内務省に関しては副田義也『内務省の社会史』(東京大学出版会、二〇〇七年三月)及び大霞会編『内務省史』一―四巻を参照。

(19) 水谷準、延原謙は『新青年』の編集者・作家。龍造寺光枝は茂丸の次弟五百枝の養子、石井俊次は久作の妹多美子の夫で耳鼻科医、安田勝は従兄弟、高木慎は耳鼻科医。

(20) 『骸骨の黒穂』に関して、昭和十年一月十七日久作は「夕刻春秋社下レインボオへ行き」文藝春秋社の佐々木茂索、藤澤閑二と会い、「大坂水平

夢野久作『ドグラ・マグラ』出版前後——神田豊徳・澄二書簡から見た出版経緯

社本部長が余の「嚙嚙と黒穂」につき脅喝せし話を」聞いている。翌日久作は警視總監に会い、茂丸の伝言を伝え、水平社に關しても依頼している。

(21) 「遅くも」か。

(22) 江戸川乱歩「探偵小説四十年」(桃源社、昭和三十六年)、及び多田茂治「玉葱の画家 青柳喜兵衛と文士たち」(弦書房、二〇〇四年九月)掲載の写真を照合した。

(23) 竹中芳「夢野久作とわが父・英太郎」(『ユリイカ』一九八九年一月号)。

(24) 『ドグラ・マグラ』広告と同じ紙面で柳田泉の『明治初期の翻訳文学』(松柏館書店)の広告が出ている。

(25) 西原氏前掲「解題」。初版は「松柏館書店版」だが、六版は「春秋社版」に改められているという。

(26) 「は、かり」か。

(27) 以下初出を示す。「名娼満月」(『富士』(臨時増刊号)昭和十一年四月)。「超人鬚野博士」(『講談雑誌』昭和十年六月―十一月)。「法的事实」は「S 岬西洋夫人殺人事件」のことであり、『文藝春秋』(昭和十年八月)に掲載。「日曜日」の継続物は結局断つた。「近世快人伝」の第一回目は『新青年』

四月号に「頭山満翁の巻」を掲載している。なお、一九三五年十二月二十日「近世快人伝」(黒白書房)が単行本化されている。

(28) 「スランプ」(『ぶろふいる』昭和十年三月号)に小説の題は伏せられているが、この「火星の女」について書かれている。

(29) 青柳は福岡日日新聞連載の「犬神博士」(昭和六年九月二十三日)昭和七年一月二十六日)の挿絵も担当している。

大鷹 涼子

(30) 杉山龍丸『わが父・夢野久作』(三一書房、一九七六年十月)。

(31) 江戸川乱歩『幻影城』(岩谷書店、昭和二十六年五月初版、再版二十九年七月)。乱歩によれば『探偵春秋』の名義上の編集者という依頼もあつたらしい。江戸川乱歩選『日本探偵小説傑作集』は春秋社から昭和十年九月に刊行されている。

なお、昭和十二年二月号には遺稿として久作の随筆「恐ろしい東京」が掲載されている。

(32) 山前譲「精力的な出版活動を背景に刊行された『探偵春秋』」(光文社文庫『探偵春秋』傑作選)二〇〇一年一月)。その後、甲賀、大下、木々三人選集が三十九年七月に中断するまで、「探偵春秋」は十冊出された。

(33) 出版年月日不明。昭和十年五月の再版か。

(34) 前掲、江戸川乱歩『探偵小説四十年』。

末筆ながら、杉山満丸様、春秋社社長神田明様、福岡県立図書館郷土資料課の方々に御礼申し上げます。

・印税明細書、及び請求書

印税明細書
杉山扇円様

昭和10年	摘要	品名	数量	定価	借方	貸方	借或貸	差引残高
1・16		ドグラ・マグラ	2450			465500		
		本代			153320			
		支払			100000			
31		本代 (10冊)			14630			
2・15		写真 (41枚)			20000			
		ドグラ 再版	500			95000		
		支払			100000			
26		印刷代			5700			
3・4		□□初期一冊代			3040			
		合計			396690	560500		163810
		梅津翁伝費用			358900			195090

請求書
杉山扇円様
金 ¥358、90

昭和	年	摘要	品名	数量	定価	借方	貸方	借或貸	差引残高
			本文組代	134	70	9380			
			奥付	1	50	50			
			中扉	1	50	50			
			凸版入	1	30	30			
			本文印刷	138	5	3450			
			コロタイプ版代	12		2000			
			コロタイプ刷代	12		3500			
			コロタイプ版下	1		70			
			用紙代	9R	8,-	7200			
			コロタイプ紙代	2R	7.50	1500			
			製本代	500	7	3500			
			表紙(紙、版)	500	8	4000			
			色紙、外題			500			
			運賃(箱、送料、配達)			660			
						35890			